

# 別れの「あいさつ」に関する一考察

—日本語教育の視点から—

岡部 悦子

## 【キーワード】

「出会い」 「別れ」 「あいさつ」 「あいさつ言葉」 書き言葉

### 1. はじめに

学校は、定期的に出会いと別れが訪れる場所である。筆者は現在、ある高校が受け入れている交換留学生に日本語を教えているが、そこでも1年に2～3度学生が入れ替わる。留学生は、留学の初めと終わりの時期に、学校の「おたより」や冊子に「あいさつ」の文章を書いたり、留学のスポンサーとなっている機関でスピーチをすることが慣例となっている。留学生の反応を見ていると、「出会い」の「あいさつ」よりも「別れ」のあいさつのほうが難しそうで、「どう書いたらいいの?」と何度も質問を受ける。

日本語教育の教科書を見ていても、「出会い」の場面を取り上げたものは非常に多いが、それに比べ「別れ」の場面が扱われているものは少なく、その学習の機会もあまり多くないように思う。私達も「別れ」という行為を日常生活の中で一見何気なく行っているようであるが、改めて「別れ」の「あいさつ」をする、あるいはその文章を書くとなると、とまどってしまうことがあるのではないだろうか。

そこで、本稿では「出会い」と比較しながら、改めて「別れ」の場面とそこで交わされる「あいさつ」の特徴について考えてみたい。次に、留学生の書いた「別れ」の文章を事例に、実際にどのような表現や内容が選択されているか調査・分析する。最後にその結果から、今後日本語教育で「別れ」の「あいさつ」について指導を行う場合に、どのようなことに留意すべきかについて考えていく。

---

<sup>1</sup> 鈴木(1968)では、あいさつをⅠ言話的なもの(phatic,例「ヤアヤア」「ハロー」など)、Ⅱ叙述・描写的なもの(phatic,・referential,例「おはよう」「さようなら」など)、Ⅲ詩的・創造的なもの(phatic,・referential・poetic,例祝詞・スピーチなど)に分類しているが、本稿はⅢのタイプを考察の対象とする。あいさつの分類については、後ほど検討する。)

## 2. 「出会い」と「別れ」

一言で「出会い」と「別れ」といっても、現実には実に様々な形で実現されている。一日のはじまりとおわり、訪問時といとまごい、旅の出発と帰還、生と死など、その例は多数挙げられる。本稿の「出会い」では、人と人が初めて知り合う、初対面の場面を考察の対象とする。また「別れ」については、留学生が留学先から自分の国に帰るといったような長期的な「別れ」の場面を対象とする。

このような「出会い」と「別れ」には、言語行動としてどのような相違が見られるだろうか。ここでは、①人間関係と情報内容、②心理的効果、の2つの点から比較をしてみたい。

### ①人間関係と情報内容

初対面での「出会い」の「あいさつ」では、基本的にあいさつをする側とあいさつを受ける側は互いに未知の関係といえる。「出会い」の「あいさつ」は、人間関係がまだ希薄な時に行われる。反対に「別れ」の「あいさつ」の場合は、あいさつをする側とあいさつを受ける側は互いに既知の関係といえる。この既知・未知の差は、「あいさつ」の内容にどのような相違をもたらすであろうか。梶原(1978)は、「あいさつ言葉」の場合は、未知の相手に対しては探索的な機能があるが、既知の相手に対してはこの機能は後退し、これまでに既に知っている相手に関する知識、相手との共体験を再確認して、相互関係を維持してゆくことが主要な機能になると述べている。

「あいさつ」の場合、「出会い」の「あいさつ」では、「あいさつ」を受ける側の抱く「未知の相手を知りたい」という「探索的な」欲求を満たすべく、「あいさつ」をする側は自分自身の名前や経歴等について述べる情報提供型の内容になると思われる。一方「別れ」の「あいさつ」では、名前や経歴等は述べる必要はないが、例えば今後の予定など既知の相手でも知らない情報があれば提供されるであろう。しかし、その内容は「あいさつ言葉」と同様、相手との共体験を再確認して、相互関係を維持してゆくことが主要な機能になるのではないだろうか。

### ②心理的効果

あいさつと心理面の関係について、まず鈴木(1968)が「出会い」のあいさつについて、人間同士の「出会い」では、外来者の方が弱い立場であり、力関係で弱い方が先に敵意のないことを進んで見せる必要があると述べている。「別れ」のあいさつについては田中(1982)が、「別れ」の際にはそれまでの関係を維持しようとする力とは逆方向の行動に出

る必要があるため、互いの関係にマイナスの影響を与えるおそれがある。そこで、何らかの形で「つくろう」必要が生じると述べている。野元（1985）は、「あいさつは一種の恐怖への対応」であり、そのため未知の者同士の「出会い」では「互いに害心を持つものでないことを示し合い、既知の物同士の「別れ」のあいさつは、「共にいた時の関係を再開のときも維持しようという意味」ではないかとしている。

これらを総合すると、基本的に「あいさつ」は「他者の接触をめぐる、不確かさや不安を解消する機能をはたす」〔梶原（1978）〕という見解に集約できるように思われる。それは「出会い」においては、あいさつする側の自己開示によって、「別れ」においてはあいさつする側の関係維持への努力を示すことによって、達成するといえるのではないか。

### 3. 本稿でのあいさつの分類

本稿では、これまで「あいさつ」「あいさつ言葉」という2種類の表現を使用してきたが、ここで本稿でのあいさつの分類について少し整理をしておきたい。

あいさつの分類については、これまで色々な試みがされてきたが、ここでは鈴木（1968）と川口ほか（1998）について見ておきたい。

鈴木（1968）はローマン・ヤコブソンの言語の機能に注目し、あいさつを3つに分類した。Ⅰは人と人が会ったときに用いる「ヤアヤア」のような、通例語形が短く、それ自身はことばとしては具体的な意味をもっていないものである。Ⅱは「おはよう」のように、ある程度の意味内容を持ってはいるが、そこに重点はなく、むしろ意味内容よりは全体を一つのまとまった公式、定型として用いられるものである。Ⅲはスピーチのように、比較的長いものである。本稿では、このⅠ・Ⅱのタイプを「あいさつ言葉」、Ⅲのタイプを「あいさつ」と表すことにする<sup>2</sup>。なお、あいさつ（「」なし、ひらがな表記）は、「あいさつ」「あいさつ言葉」の両方を含んだ一般的な概念とを示す場合に用いることにする。

川口ほか（1998）では、「あいさつ」を「おはよう」などの比較的短い定形語句表現のグループと、「卒業生総代のあいさつ」のように比較的長いスピーチ形式のあいさつに二分した上で、後者のグループを「ご挨拶」と呼び、待遇表現としての枠組みから分析を行っている。鈴木との分類と比較すると、ここでの〈定形型〉はⅡタイプ、〈スピーチ型〉はⅢタイプが相当し、Ⅰタイプのものは含まない立場をとっている。

<sup>2</sup>甲斐（1985）でも同様な立場をとっている。

## 4. 「別れ」のあいさつの調査

### 4-1 調査の目的

今まで「別れ」と「あいさつ」の特徴について別々の検討してきたが、ここでは「別れ」の「あいさつ」がどのように行われているかについて、その実態を把握してみたいと思う。

その一つの事例として、今回は早稲田大学日本語研究教育センターが発行した『日本語センター報』（現在は『日本語センターニュース』と改名）の「卒業（修了）によせて」という欄に掲載された、留学生による「別れ」の「あいさつ」を調査の対象とする。この『センター報／センターニュース』は、日本語センターの発行する公式な出版物であり、読者は日本語センターの関係者をはじめ、無償で広く配布され一般の人の目にも触れるものである。

日本語によるあいさつの実態をみるという目的からすると、本来ならばまず日本語母語話者によるあいさつを先に行うのが適当かもしれない。しかし、本稿では「日本語教育」という視点から、日本語を母語としない人による「あいさつ」の傾向、あるいはバラエティーを把握してみたいという考えから、この資料を選択した。またこの「卒業（修了）によせて」という欄は、1994年からほぼ同様の形式で継続され、現行の『日本語センターニュース』掲載された分を含めると全部で26の「あいさつ」が収録されており、学校という場で行われる「別れ」の「あいさつ」を観察するという点からも興味深い資料であると思われる。

この資料のもう一つの特徴は、書き言葉による「あいさつ」という点である。今までの「あいさつ」に関する先行研究はどちらかと言えば話し言葉が中心であったように思われる。話し言葉で「あいさつ」を行う場合も、事前に紙に書いて準備されることが多いことから、書き言葉的な要素も多分に含まれているが、初めから「書く」ことが目的にされている場合には、やはり別の特徴がでてくるものと予想される。

以上のことをまとめると、今回の調査は、書き言葉による「別れ」の「あいさつ」の調査となる。この「あいさつ」の書き手である留学生は、早稲田大学日本語研究教育センターの別科日本語専修課程で1年間日本語勉強した学生達26名で、その国籍は14カ国に及ぶ<sup>3</sup>。留学生の日本語のレベルは、『日本語センター報』12～17号（1994～1997年）までに関しては紙面に記載された所属クラス<sup>4</sup>から判断すると、上級の学生が

<sup>3</sup> アジア系7カ国17名、ヨーロッパ系7カ国9名。詳細は【表】を参照されたい。

<sup>4</sup> 『早稲田大学別科日本語専修課程要覧』『別科日本語専修課程設置科目一覧・

中心となっている。1998年以降に掲載されたものにはクラスに関する記述がないため正確には把握できないが、紙面では同様の形式が継続されており、学生のレベルもほぼ同等と思われる。

#### 4-2 調査項目

「別れ」の「あいさつ」について今回は、①表現形式、②表現内容、という大きく2つの観点から調査してみることにした。

##### ① 表現形式について

###### 1) 「あいさつ言葉」について

「あいさつ言葉」と「あいさつ」は異なる機能を持ちながらも、互いに重なり合う性質もある。特に「あいさつ」は「あいさつ言葉」を組み込んで構成されていることよくある。「別れ」の「あいさつ」の中にはどんな「あいさつ言葉」が含まれているか、その種類と数について調べてみたい。

###### 2) スピーチレベルについて

鈴木(1968)で「内容を表す表現手段であることばそのものの選び方が、一様に大切になっている」と述べられている。また、川口ほか(1998)においても、「言材」は一定以上の丁寧さのあるものが選ばれる」と述べられているように「あいさつ」における言葉の選択は重要な問題である。「別れ」の「あいさつ」の中では、どのような表現が使われているのか、「スピーチレベル」に注目して調査してみたい。「スピーチレベル」とは、ある「文話<sup>5)</sup>」の中で選択される「表現の待遇度」と考える<sup>6)</sup>。ここでは、「あいさつ」の中で使用される「文体敬語<sup>7)</sup>」と「敬語<sup>8)</sup>」の種類と数について調べてみることにする。

---

講義内容』(いずれも早稲田大学日本語研究教育センター発行)を参照。

1997年までのクラス編成は、中級クラスでは基礎語彙2000語、基礎漢字700字程度を既に習得したもの、上級クラスでは語彙6000語、漢字1500字程度を既に習得したもの、研修クラスでは上級クラス以上の日本語力を有する学生をそれぞれ対象としていた。1998年以降は、「聴解」「読解」「口頭表現」「文章表現」「文章表現」の4技能および「総合」科目を、各技能のレベルによって履修する制度となっている。

<sup>5)</sup> 「文話」についての規定は、蒲谷・川口・坂本(1998)を参照。

「文話」とは、「表現主体」が「表現意図」を叶えるための表現上の一まとまり)のことで、「談話」「文章」の総称である。(蒲谷・川口・坂本(1998) p.34より。)

<sup>6)</sup> 岡部・蒲谷(2000)参照。

<sup>7)</sup> 「文話」全体の丁寧度に関する敬語で、「デス」「マス」がこれにあたる。

(蒲谷・川口・坂本(1998) p.56を参照。)

<sup>8)</sup> ここでは狭義の敬語をさす。

## ②表現内容について

### 1) 話題の人物について

梶原(1978)では、「あいさつ言葉」を誰についてのことを述べるかという点から、i) 自己志向的 (self-oriented)、ii) 他者志向的 (other-oriented)、iii) 中立的 (neutral)、の3つに分類している<sup>9</sup>。人間関係を維持するために誰に関する話題を選択するかは、「あいさつ」においても重要である。特に本稿では、i) 及び ii) の選択の仕方に注目していきたいと思う。

### 2) 話題の時間軸について

同じく梶原(1978)では、時間軸にしたがって、「あいさつ言葉」を i) 過去に関するもの、ii) 現在に関するもの、iii) 未来に関するもの、の3つに分類することもできると述べている<sup>10</sup>。先に、「別れ」では相手との共体験を再確認して、相互関係を維持してゆくことが主要な機能になるのではないかと述べたが、「共体験を再確認」するとなると過去に関する話題が多くなるのか、それとも現在の状態を述べるのだろうか。「あいさつ」の話題選択においても興味深い問題であり、この分類を試みてみたい。

### 3) 話題への評価について

西江(2000)は「すべてのことばは、その長短にかかわらず、なんらかの感覚的、情動的評価を受ける」と述べているが、この評価という視点は「あいさつ」の中でも重要な意味を持っているように思われる。鈴木(1968)の「いわゆる「きれいごと」が多い」という指摘や、川口ほか(1998)の「どのような「内容」でもすべて最終的には肯定的に捉えて表現する必要がある」という指摘のように、「あいさつ」では基本的にプラス(良い、うれしい、肯定的 etc.) の評価が述べられると予想されるが、それは具体的な事例の中でどのように実現されているのだろうか。マイナス(悪い、さびしい、否定的 etc.) の評価はないのだろうか。この話題に関する評価についても調べてみることにする。

---

<sup>9</sup> 歩き疲れているときに、路上で友人と出会った際に、「いやあ、まいったよ。」と呼びかける場合、それは i) にあたり、その際友人の方が、ふらつく足どりを見て、「一体どうしたの。」と訊ねれば、それは ii) と考えられる。出会いに参加している双方に直接関連しない話題を皮切りにして、インターアクションが開始されれば、それは iii) の例となる。たとえば天候に関する「あいさつ」などは iii) の例であろう。(梶原(1978) p.82 より。)

<sup>10</sup> 天候を例にとると、「夕べはひどい雷だった。」は i) に、「実に良い天気だ。」は ii) に、「雨が降るぞ。」は iii) にそれぞれあてはまる。

(梶原(1978) p.82 より。)

## 5. 調査結果

### 5-1 データの整理

調査にあたって、まず留学生による「あいさつ」を過去のものから掲載された順番に番号をつけた。その後、「あいさつ」を1文単位に区切り、表現形式、表現内容を検討した。表現内容については、1つの文に2つ以上の話題が盛り込まれている場合は、その1つ1つの話題ごとに先にあげた調査項目について検討した。それぞれの「あいさつ」における話題の種類と数を、文末の【表】に整理した。

### 5-2 表現形式について

#### 1)「あいさつ言葉」について

「別れ」の「あいさつ」で使用されていた「あいさつ言葉」は、大きく「ありがとうございました」のように感謝を表す系列と、「さようなら」のように別れを告げる系列の2種類がみられた。「あいさつ」全体で「ありがとうございました」は3例、「さようなら」は4例、「さらば」は1例であった。感謝の表現は、「あいさつ言葉」を使用するものより、

(1) 早稲田大学の日本語センターの先生方に感謝している。(学生4)のようにメタ言語表現によって表されていることが多かった。「感謝しています」7例、「ありがとうと言いたい」2例、「お礼を言いたい」1例、「ありがたいと思う」1例など、全部で11例あった。別れを告げる系列には、メタ言語表現の使用は見られなかった。

このことから、「別れ」の「あいさつ」では「別れ」を告げることも感謝を表す傾向があることが分かる。これはあいさつをする側が、あいさつを受ける側から受けた恩恵を再度表現することによって「相手との共体験を再確認して、相互関係を維持してゆく」という「別れ」の「あいさつ」の機能を果たそうとするものであると思われる。「あいさつ言葉」よりメタ言語表現の方がよく使用される一因には、書き言葉による「あいさつ」であり、あいさつをする側とあいさつを受ける側が対面していないことがあるのではないだろうか。これについては「文体敬語」との関係ともあわせて考えてみたい。

感謝を表す系列、別れを告げる系列以外の「あいさつ言葉」としては、(2) その時はよろしく願いいたします。(学生1)のように次に再会した時の関係に触れるものが1例あった。

#### 2)スピーチレベルについて

今回の「あいさつ」は、日本語センターの「広く一般の人を対象とした公式な印刷物」という性質から、ある一定のスピーチレベルが必要と

されるものである。この中で「文体敬語」「敬語」がどのように使用されているか見ていきたい。

文体使用を調査してみると、「文体敬語」の「デス」「マス」が付加した丁寧体のみを使用しているものが7例、丁寧体の中に一部普通体が使用されているものが3例、「文体敬語」の使用のない普通体のみのもものが12例、普通体の中に一部丁寧体が使用されているものが2例で、普通体使用が最も多い。普通体の中に一部丁寧体が使用されているものでは、

(3) しかし、「さよなら」というより「ありがとう」と言いたい。

そういえば・・・、みなさん、本当にいろいろありがとうございます。

(学生24)

のように、いずれも「ありがとうございました」という「あいさつ言葉」の部分で丁寧体になっている。

あいさつをする側とあいさつを受ける側が対面しない書き言葉による「あいさつ」では、相手への敬語である「文体敬語」は必ずしも必要とされず、その有無は「あいさつ」の丁寧さに直接関与しないと思われる。しかし、「ありがとうございます」を「ありがとう」と「文体敬語」のない形で表現されると、文体的に違和感があるため、その使用が回避されるか、丁寧体で表現するという手段が選ばれるのではないだろうか。「さようなら」の場合は、丁寧体・普通体の使い分けがないため、「あいさつ言葉」がそのまま使われるのではないと思われる。

次に「敬語」使用について見ると、「あいさつ」全体で9例で、比較的使用が少なかった。これらがどこで使われているかを見てみると、

(4) このビルのなかで、早稲田大学の先生方に教えていただいて、楽しい1年間を過ごせたからだ。(学生14)

(5) 日本語センターでの時期は、事務所の方も先生も本当に優しくして下さいました。(学生22)

のように、「～ていただく」「～くださる」という「先生」「事務所の方」という上の立場の人からの恩恵の授受を表現する際に用いられる例がほとんどを占めた。その他の用例には、

(6) それは自分の目でこの美しい日本を味わって、私よりもずっとすばらしい思い出を持ちながら、お国に帰れるようお祈りしているということである！(学生23)

というものがあつた。「敬語」の使用が比較的少ない理由には、1つは話題の選択が関係していると思われる。これは後でも触れるが、今回の「あいさつ」の話題には自己志向的なものが多かったことがある。2つ目には、学生による「あいさつ」であるため、話題の人物にも学生が多



く、スピーチレベルは高くなくてよかったということも考えられよう。

### 5-3 表現内容について

#### 1) 話題の人物について

ここでは、「あいさつ」の中で誰についての話題が展開されているのか、話題の人物について、i) 自己志向的 (self-oriented)、ii) 他者志向的 (other-oriented)、iii) 中立的 (neutral)、の 3 つの点から調査を行った。

i) 自己志向的な話題としては、「あいさつ」の書き手である留学生自身の経験や意見が表現されている、次の例のようなものを分類した。

(7) 日本では教室の中でも外でも全部勉強だと思って、色々な場所に見学に行ったり、旅行したりしたのは楽しくて、いい勉強になった。(学生 1)

ii) 他者志向的な話題には、友人との思い出、先生や事務所への感謝の気持ちなど、「あいさつ」の書き手以外の人物に関する出来事や意見が述べられている、次の例のような話題を分類した。

(8) 学校では留学生同士も日本人のボランティアも意見の交換をしたりして、活発な授業になった。(学生 24)

iii) 中立的な話題は「あいさつ」の書き手をはじめ、どの人物にも属さない一般的な常識・考え・事実が話題となっている場合、社会的な話題、あるいは諺などが引用されている場合、この中に分類した。

(9) 「光陰矢のごとし」。(学生 2)

このように話題を分類し、その結果をまとめたものが文末の【表】である。「あいさつ」全体の傾向をみると、最も多いのが自己志向的な話題で、次に他者志向的な話題、中立的な話題の順となった。「別れ」においては「相手との共体験を再確認して、相互関係を維持してゆくこと」が重要であることから、他者志向的な話題が多いかと予想したが、結果的には自己志向的な話題がその約 2 倍あった。個々の「あいさつ」を見てみると、自己志向的な話題が中心であるが部分的に他者志向的な話題も含むものが 19 例、自己志向的な話題のみが 3 例、自己志向的な話題と他者志向的な話題がほぼ同数のものが 4 例で、他者志向的な話題のみというものはなかった。

自己志向的な話題が多くなった理由には、この「あいさつ」は書き言葉であり、あいさつをする側とあいさつを受ける側が対面しないことに加え、読者に広く一般の人にも含まれることが考えられる。これらのことからあいさつをする側とあいさつを受ける側との関係の維持という「別れ」の「あいさつ」の機能がやや希薄になっている可能性が考えられる。そのほかの理由としては、あいさつをする側がその印象をあいさつを受

ける側に強く残す、という方法も関係を維持する方法の一つといえるのかもしれない。

## 2) 話題の時間軸について

次に、「あいさつ」の話題について、「あいさつ」の書き手がその話題の時間軸（あるいは時間的な焦点）をどこにおいているかについて、

i) 過去に関するもの、ii) 現在に関するもの、iii) 未来に関するもの、に分けて考えてみたい。

i) 過去に関するものには、留学前・留学後の状態や出来事、心境を述べたものが分類できる。

(10) 日本の教育制度の厳しさについて、たくさんのことを聞いたので、授業と先生は少し恐かったです。(学生 21)

ii) 現在に関するものには、現在の自分自身の心境や能力について、あるいは留学生活への評価などがある。

(11) 私にとってはこの 1 年間はかけがえのない経験になり、いろいろな面で成長できたと思っている。(学生 13)

iii) 未来に関するものには、将来の抱負や、再会の約束、他者への祝福を述べたものが分類できる。

(12) 今年の卒業生がこれから有名な人物になるようにお祈りしている。(学生 18)

このほか、一般常識や諺の引用などは、「時間軸無し」と考えた。

【表】に結果をまとめてみると、自己志向的な話題では、過去・現在ともに多いが、最も多いのは現在に関する話題である。中立的な話題は現在に関する話題が最も多く、他者志向的な話題では過去に関する話題が多くなっていることがわかる。「相手との共体験を再確認」という「別れ」の機能を考えると、この結果は妥当であると思われる。また現在に関する他者志向的な話題には、感謝の表明が中心を占めていた。未来に関する話題は全体的に少ないという傾向がみられる。これは、留学生が自国に帰る時の「別れ」であり、あいさつをする側と受ける側が再会の可能性が低いために未来のことが話題になりにくいためだろうか。

## 3) 話題への評価について

最後に、今まで見てきた話題について、あいさつをする側はどのような評価を述べているかということについて考えてみたい。話題の評価は、プラスの評価、マイナスの評価という 2 つの方向から検討してみたい。

(+) プラスの評価には、あいさつをする側が「良い、うれしい、肯定的」などと判断したものを分類した。

(13) ここに来て一番大切に思っているのは、違う国の学生と知り合えたことである。(学生 14)

(一) マイナスの評価としては、あいさつをする側が「悪い、さびしい、否定的」などと判断したものを分類した。

(14) あれも、これもと思うとやり残した事が沢山あり、反省しています。(学生 2)

評価については、話題の人物との関係に注目し、自己志向的・他者志向的・中立的という話題の人物の分類ごとに整理をして【表】にまとめた。全体的には、プラス評価がマイナス評価より多いことがわかる。これは、鈴木(1968)の「いわゆる「きれいごと」が多い」という指摘を裏付ける結果と言えよう。話題の人物ごとに見てみると、自己志向的な話題ではプラス評価はマイナス評価の約2倍であるのに対し、他者志向的な話題ではプラス評価はマイナス評価の約7倍となっている。他者志向的な話題の評価は圧倒的にプラスに偏っているのは、やはりあいさつする側と受ける側の関係を維持するためと言えるだろう。逆に、自己志向的・中立的にはマイナスの評価が比較的しやすいと思われる。

また、川口ほか(1998)の「どのような「内容」でもすべて最終的には肯定的に捉えて表現する必要がある」という指摘のように、マイナス評価の後でプラス評価が補われている例が17例見られ、この指摘についても裏付けられたといえる。

(15) 初めて来た時、古い7号館には少し失望したが、今はこのビルを懐かしく思う。(学生 14)

(16) 日本は先進国だから、日本の発達したたくさんを、自分の国でもっと取り入れてほしいが、自分一人では無理だと思う。

しかし、できるだけ他の人に日本の長所を伝えるようにしたい。(学生 1)

ほとんどの場合、「あいさつ」の中のプラス評価がマイナス評価を上回っているが、留学生活が非常に大変だったためか、1例(学生 8)だけマイナス評価が上回っている例があった。これはこの学生だけが正直で他の学生がそうでなかったのかは定かではない。しかしながら、「あいさつ」の中の評価は関係を維持することに主要な目的がおかれるため、その評価は必ずしもあいさつをする側の真の評価であるとは限らないということも、確認しておく必要があると思われる。

## 6. まとめと今後の課題 -日本語教育での指導にむけて-

本稿では、「別れ」の「あいさつ」について考察を行ってきた。「別れ」と「出会い」の比較、「あいさつ言葉」と「あいさつ」の区別、そして留学生の書き言葉による「別れ」の「あいさつ」について、表現形式と

表現内容から試験的な調査・分析を行った。

日本語による「別れ」の「あいさつ」の全体像を知るには、日本語母語話者の「あいさつ」資料の収集・分析、日本語学習者の母語別・レベル別の「あいさつ」資料の収集・分析、書き言葉による「あいさつ」と話し言葉による「あいさつ」の比較、場面の相違による「あいさつ」の比較、他の言語・文化における「あいさつ」の比較など、まだまだ検討すべき課題が残っている。本稿で行った調査は試験的なものであり、また今後これらの課題を少しずつ進め、その結果を比較してこそ意味が出てくると思われる。引き続き、様々な角度から研究をしていきたい。

日本語教育における「別れ」については、「あいさつ言葉」の指導は初級から行われるが、「あいさつ」の指導については、冒頭でも多少述べたように、日本語教科書の中で取り扱われている例は少ない。また、本稿のような留学先から帰国するといった「別れ」の場面が大きくとりあげられているのは、管見では「話す」「書く」「読む」「聞く」の4技能の育成を目的にした総合的な教科書の中では、①『日本語中級Ⅰ』2・14課、②『新日本語の基礎Ⅱ』50課、③『Japanese For Everyone』27課、④『みんなの日本語Ⅰ』25課、⑤『中級日本語コースⅡ』15課のみであった。日本語教科書で取り上げられることが少ない理由には、教科書が主に日本に長期的に滞在する日本語学習者を対象しており、帰国という場面が想定されていないからではないかと思われる。また、これらの教科書のうち、「別れ」の「あいさつ」が取り上げられているのは①・②・③であった<sup>11</sup>。すべての教科書が話し言葉による「あいさつ」であり、書き言葉を対象としているものはなかった。

すべての日本語学習者が「別れ」の「あいさつ」の学習を必要しているとは限らないため、必須の学習項目とは言えない。しかし、本稿で度々繰り返しているように、「別れ」は人間関係を維持する上で重要な場面である。そのため、学習者が「別れ」の「あいさつ」を必要とする場面が来たら、適切に指導しなければならない。

その際の指導上の留意点としては、まず「別れ」が人間関係を維持していくための言語行動であることを確認することがあげられる。次に、「あいさつ」が行われる場とその表現手段によって決まってくる「あいさつ」の表現形式・表現内容の特徴についても理解させる必要があるだろう。「あいさつ」は言語や社会・文化によって異なるものである。ま

---

<sup>11</sup> ④・⑤は「あいさつ」ではなく、対話形式で別れを告げる場面がとりあげられている。①は、「あいさつ」と対話形式の2種類がある。⑤では、「別れ」という機能を1つの課で大きく取り上げていることが他の教科書と異なる。

た、学習者自身の経験や個性によっても表現したい内容が自ずと異なるのも当然のことであろう。最終的には、学習者の個性を尊重しながら、適切な表現を実現するべく支援していくことが教師の役割ではないかと思われる。

#### 【資料】

『日本語センター報』早稲田大学日本語研究教育センター

第12・13・16・17・20・21・22号（1994～1999）

『日本語センターニュース』早稲田大学日本語研究教育センター  
創刊号・第3号（共に2000）

#### 【日本語教科書】

『日本語中級Ⅰ』国際交流基金 日本語国際センター（1993）凡人社

『新日本語の基礎Ⅱ』海外技術者研修協会編（1997）

スリーエーネットワーク

『Japanese For Everyone』名柄迪編（1993）学研

『みんなのほんごⅠ』（1999）スリーエーネットワーク

『中級日本語コースⅡ』名古屋大学日本語教育研究グループ（1995）

名古屋大学出版会

#### 【参考文献】

岡部悦子・蒲谷宏（2000）「日本語学習者の口頭発表場面におけるスピーチレベルについて」『講座 日本語教育』第36分冊 早稲田大学日本語研究教育センター

甲斐睦朗（1985）「現代日本語のあいさつ言葉について」『國語國文學報』樋口芳麻呂教授退官記念号 第42集 愛知教育大学国語国文学研究室

梶原景昭（1978）「あいさつの民族誌 ―あいさつ言葉の分析―」

『大阪大学 人間科学部紀要』第4巻大阪大学人間科学部

蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店

川口義一・坂本恵・蒲谷宏（1998）「待遇表現としての「ご挨拶」について」

『早稲田日本語研究』第6号 早稲田大学国語学会

鈴木孝夫（1968）「あいさつ論 あいさつの言語社会学的考察」

『言語生活』196号 筑摩書房

田中 望（1982）「「別れ」の言語行動様式 日米比較のために」

『言語生活』No.363 筑摩書房

西江雅之（2000）「挨拶とその型」『月刊言語』Vol.29 No.4 大修館書店

野元菊雄（1985）「あいさつ言葉の原理」『日本語学』Vol.4 No.8 明治書院

（おかべ えつこ／文学研究科日本語日本文化専攻 博士後期課程1年）

